

長野県立歴史館たより

2016年 **冬**号 vol.89

特集

信濃国の城と城下町 ～発掘調査が謎を解く～



平成28年度冬季展

信濃国の城と城下町 ～発掘調査が謎を解く～

会期：平成28年12月17日(土)～平成29年2月26日(日)

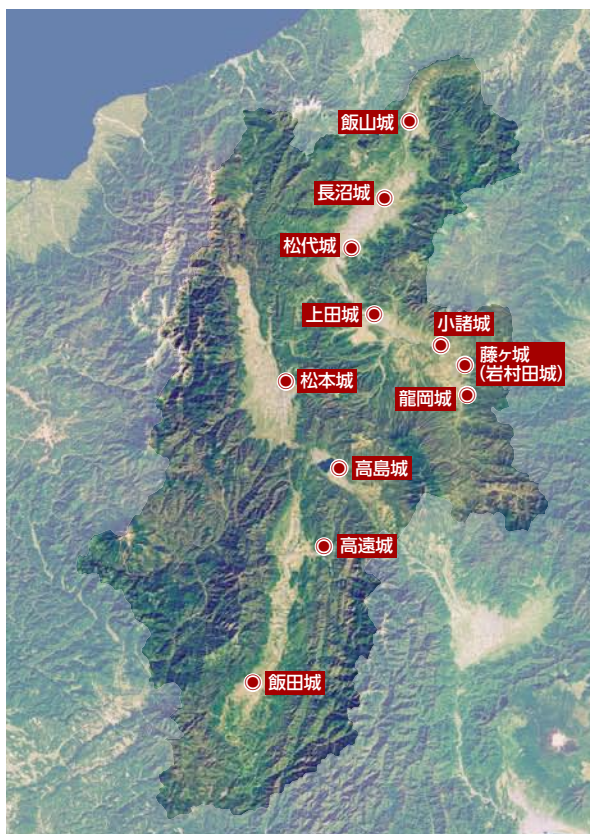
◆増加する城や城下町の発掘

全国に「城」とよばれるものは4万ヶ所以上ありますが、近世城郭とよばれる城は、300ヶ所ほどにすぎません。

信濃国には、この近世城郭にあたる城は11城あります(下図参照)。それぞれの主となった大名は、拠点となる城を中心に城下町を形成し、その維持・発展につとめました。

近年、市町村教育委員会による城跡や城下町遺跡の発掘事例が相次ぎ、文献に記されていない城郭・城下町の姿が徐々に明らかになってきています。

当館では、城をもつ県内の市町村教育委員会と共同研究を行ってきました。そのまとめとして、今回の企画展を行うことにしました。



江戸時代 信濃国の城

◆これが城郭・城下町の発掘だ!

～松本城跡・松本城下町跡～

国宝松本城を中心とする松本城下町では、松本市教育委員会により、城跡や城下町跡での発掘が100件以上行われています。

松本城の表玄関にあたる大手門枡形跡の調査では、たくさんの瓦がみつかりました。これらの瓦は、明治4年頃大手門が壊された際に捨てられたものと考えられています。瓦には松本藩主であった水野氏のおもだか沢潟紋や戸田氏の六星紋がみられます。



このことから、水野氏家紋(沢潟紋) 軒丸瓦の修理は、いくつかの城主の時代にわたって行われ、同じ屋根に違う家紋の瓦が並んでいた可能性もあります。



松本城跡出土 碁石

武家屋敷が立ち並んでいた三の丸跡の調査では、碁石や将棋の駒、植木鉢やえじょうく餌猪口などがみつかりま

す。戦がなくなった平和な時代に鳥を飼い、碁や将棋に熱中し、盆栽などを趣味としていた武士の暮らしぶりがうかがえます。

商人などが住む町屋の調査からは、荷札や分銅などの商売道具のほか、その店の商売がわかるような出土品もあります。本町の調査では、約5千点もの未使用の砥石が穴の中からみつかりました。ここは砥石問屋でした。

江戸時代、松本城下町は何度も火災に遭っています。これらの砥石も火を受けていました。火事

に遭い、売り物にならなくなった砥石をまとめて捨てたようです。



松本城下町跡・本町出土
火災に遭い捨てられたたくさんの砥石

◆刀装職人の工房

～松代城下町跡～

長野市松代城下町でも、道路整備や病院改築などに伴う発掘調査が行われています。松代は、北国脇街道が通り、その街道沿いに商人たちが住んでいました。その一角から短刀や数多くの切羽・柄縁といった刀装具、研ぎ跡の痕の残る砥石などが出土しました。ここには刀装職人の工房があったようです。

松代は、信濃国最大10万石の城下町で、信濃で最も多く武士が住んでいた町です。武家の町にふさわしい出土品といえます。



松代城下町跡出土 切羽（左）と柄縁（右）

◆城下町にさかえる「茶文化」

～飯田城下町遺跡～

飯田城下町は、信濃と三河（現在の愛知県東部）を結ぶ伊那街道（三州街道）が通り、さらに駿河（静岡県）に通じる遠州街道もつながるなど交通の要地で、物資輸送の中継地として、商業が大変盛んな町でした。そのことが出土品からもみてと

れます。現在も商店街となっている本町・通り町周辺からは、数多くの茶道具が出土し、茶室と思われる遺構もみついています。



飯田城下町遺跡出土 茶器

茶文化は、信長が名物茶道具を集めるなど、戦国時代から江戸時代にかけて、武家階級を中心に広がりました。飯田では、武家に加え、富を得た豪商達も、茶道具を集め茶室を建てるなど、高い文化をもっていた様子がうかがえます。

茶器の中には、高級茶器である美濃地方（現在の岐阜県）で焼かれた志野焼・織部焼もみられます。ただ出土品はほとんどが割れた破片です。そこで、今回は岐阜県土岐市出土の重要文化財を含む志野・織部10点を特別展示することとしました。



黒織部茶碗 左：土岐市元屋敷窯跡出土（重要文化財）
右：飯田城下町遺跡出土

信濃の城下町では、素晴らしい茶器が使われていたのです。

◆城下町ごとのテーマを楽しんで

城内に温泉があった諏訪高島城、幕末につくられた洋式五稜郭の佐久龍岡城など、個性あふれる信濃国の城と城下町。今回の展示では、それぞれの城・城下町ごとにテーマを決め、そこにスポットを当てた展示にしています。それぞれの姿を、出土品から感じてみてください。

『信陽松城絵図』(松代城下町絵図)

(106×77cm 軸装 江戸時代中期 当館蔵)

右の図は、当館所蔵の『信陽松城絵図』(松代城下町絵図)です。寛政4年(1792)に写されたとの記載があります。

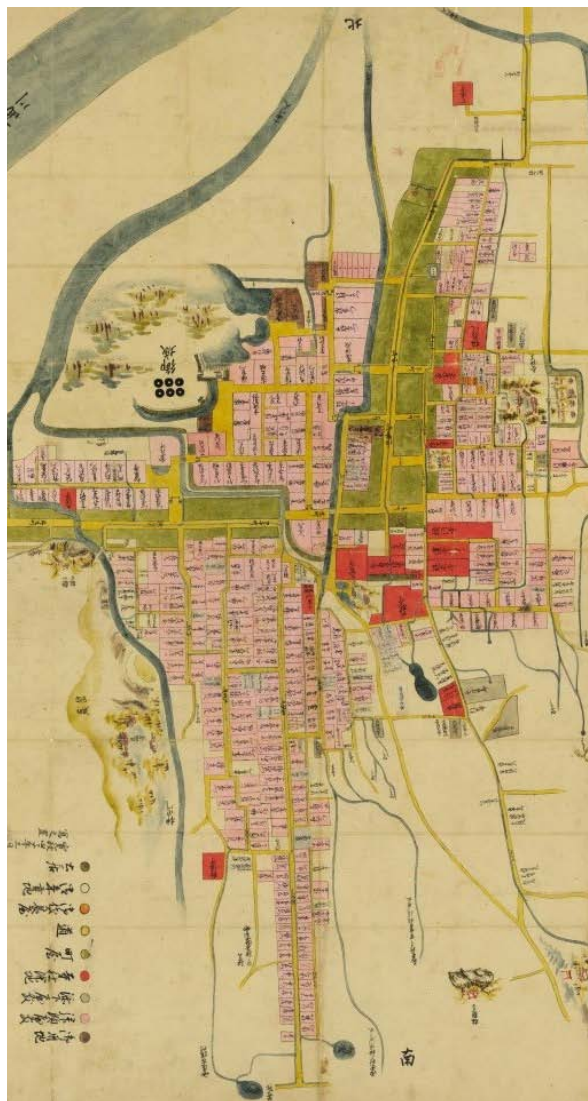
松代城は、左上(北西)に流れる千曲川を天然の堀としたため川の近くに位置し、城の位置に当時藩主であった真田氏の家紋六連銭が描かれています。その南東に広がる城下町は、武家地を桃色、町人地を緑色、寺院を赤色と鮮やかに塗り分けており、武家地については、その居住者の名前が記されています。

下図は、武家地の一部を拡大したものです。武家の名前の書き方をみてください。いろいろな方向で書かれています。なぜでしょう？

これは、その家の門の位置を表しています。文字の頭が向いている所に門があったということです。これは寺院の名前にも同じことがいえます。いろいろな情報を地図に入れ込もうとした当時の人びとの工夫の一つです。

こういった絵図は、各地の城下町にみられます。何の目的でつくられたのでしょうか。

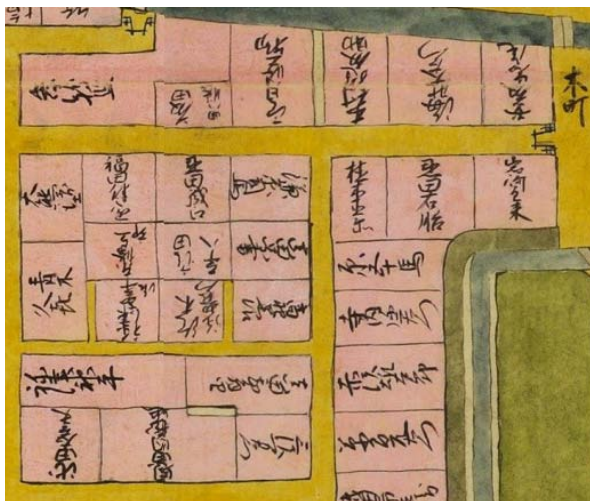
それは、武家屋敷の管理であったと考えられます。屋敷は個人所有ではなく藩から与えられたものです。武家屋敷を監督する藩の役人は、どこに誰が住んでいるのかを掌握する必要があり、そのために地図が必要でした。この絵図も、小さな紙



が貼られ、新しい家主が書かれていることから、そういった目的で使われていたと考えられています。

松代は、元和8年(1622)真田信之が入封後、明治維新まで国替え(転封)はありませんでしたが、大名の転封があった城下町などでは、前の藩主からの引継絵図や新しい藩主が城下町に家臣団を配置するための地図などが残されています。

近世城下町として約250年間繁栄した松代は、明治以後急激な開発がなく、昔の町割りがよく残っています。古地図をみながら、現代の町をみて歩いてみると……面白そうですね。



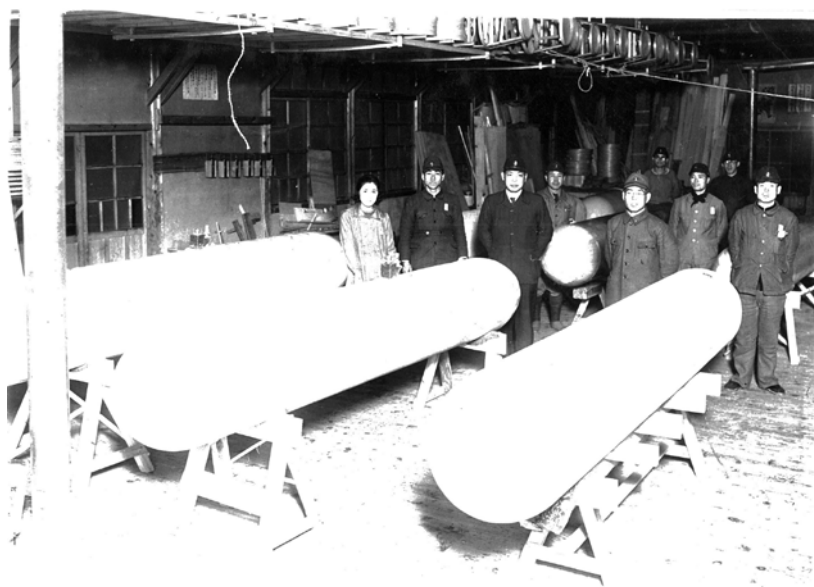
平成27年8月、当館において戦後70年企画「長野県民の1945」の展覧会を実施したところ、反響が大きく、アジア太平洋戦争に関する資料寄贈の申し出が相次いでいます。今回紹介する高橋航空機製作所に関する資料もその一つです。寄贈された資料の中には、『会社設立認可申請書』『決算報告書』『営業報告書』等43点の資料があり、家具・建具を作る組合が軍需工場へ転換していく過程を知ることができます。

長野市木工家具建具工業小组合は、商工省の助成により設立され、昭和12年(1937)に名古屋陸軍造兵廠、15年に豊川海軍工廠の指定工場となり兵器の木部を生産をするようになりました。ところが太平洋戦争が勃発すると、グライダーなどの木製兵器を製作していた海軍管理工場の茅ヶ崎製作所の協力工場となり、木製航空機の翼や木製落下増槽^{ぞうそう}の製作に力を入れることになりました。戦況が悪化した19年8月19日に、生産増強のため組合から会社組織に変更となり、理事長の名前をとって株式会社高橋航空機製作所が設立されました。その後、軍需省指定監督工場^{ほうちょう}の指令を受け、工場防諜強化並びに工場を秘匿するた

め通称号使用の通牒があり、工場は「皇国第2508工場」と呼ばれました。場所は長野市中御所、現在のJR信越本線のすぐ南、国道19号の両側に、敷地面積約3,000㎡の中に工場が7棟あったようです。一年間の生産目標は、木製航空機の翼600機分と落下増槽2,400機分で計画されました。

資料の中に、『敵前航空機生産倍加実施期間(自昭和十九年九月一日 至同年十月末日)』という生産量を増加、品質を向上させる運動の実施計画があります。工員や動員された多くの長野第二高等女学校報国隊第4学年生を含む学生を、地域別と班別に分け、出勤率をもとに競わせ、賞金を支給するという内容です。また、工場敷地の風景、工場の設立式、木製増槽などの写真が16枚あります。

先の大戦を体験されている人たちが年々減りつつある今、平和を守り、戦争の惨禍を二度と繰り返さないためには、いかに後世に戦争を伝えていくかが大きな課題となっています。このような『戦争資料』の掘り起こしや保存は、今後重要な課題となってきます。



製造された木製増槽（海軍艦上偵察機『彩雲』用）

はじめに

当館所蔵の古墳時代馬具の中には、平成7年(1995)に個人からご寄贈いただいた伝長野市松代町竹原笹塚古墳(以下：竹原笹塚古墳)出土の轡くつわ他と、上信越自動車道建設に伴い平成2年(1990)に長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された長野市若穂川田の大星山古墳群第2号古墳(以下：大星山2号墳)出土の飾金具があります。この2例の馬具について近年の古墳時代馬具研究をもとに考えてみます。

出土古墳の形状と馬具について

大星山2号墳は、現況では尾根筋方向一辺約17mの方墳と考えられ、5世紀第2四半期の築造と考えられています。埋葬主体は石棺状に板石が残り、内のり主軸長215cm、幅60～80cm、高さ25～35cmを測り、最古の合掌形石室構造であったと位置づけられました。馬具は石室内から飾金具が3点出土しています。それぞれ金銅張りで直径2.2cm前後、高さ1.3cm前後の半球形で、中央に小孔があり、10本の稜りょうと溝みぞからなります。飾金具の厚さは0.5～1.0mm前後で重さは1.83g～4.00gです(図1、文献1)。

竹原笹塚古墳は、径26m、高さ3.6mの円形積石塚古墳です。埋葬主体は石室全長6.8m、玄室長5.4m、幅1.8～2.0m、羨道長1.4m、幅1.2mの横穴式石室構造の合掌形石室です(文献2)。馬具は伝竹原笹塚古墳出土とされていますが、石室内からの出土馬具と考えられています。馬具には立聞部に長く連なる兵庫鎖ひょうこが装着されていた可能性が考えられる鉄地金銅張の楕円形十字文鏡板付轡くつわ、鉢部に円文を打ち出した無脚雲珠むきゃくうず、「花形座」を有する八脚の鉢状雲珠があります(図2、文献3)。

所蔵2例の馬具研究から導き出されたシナノ古墳時代の画期

大星山2号墳出土の飾金具3点について、20年前の報告書では「この種の金銅あるいは銀製品は、玉・馬具・飾金具などに見られるが、本例は他に装身具・馬具類を伴わない。ふたつは近接して出土したが、合わせて玉としたという状況もなく、端部にも接合されていた痕跡も認められない。また、小孔に挿入されたと思われる部分もない」と報告されています(文献1)。

しかし、近年の研究成果では、大星山2号墳石室内から出土した鉄鏃てつぞくが中国吉林省集安の太王陵たいおうりょう出土鉄鏃と類似しているとする風間栄一氏(文献4)や、舶載品の公算が大きいとする平林大樹氏(文献5)の指摘とともに、諫早直人氏(文献6)は大星山2号墳石室内から鉄鏃とともに出土した飾金具が高句麗の王陵から出土した飾金具と類似すると指摘しています。

最古の合掌形石室内から高句麗由来と考えられる鉄鏃や馬具飾金具が出土していることから、合掌形石室構築が渡来文化によるものなのか、その由来を考える上で研究の画期となります。

竹原笹塚古墳については、昭和57年(1982)に刊行された『長野県史』では、馬具を含めた副葬品

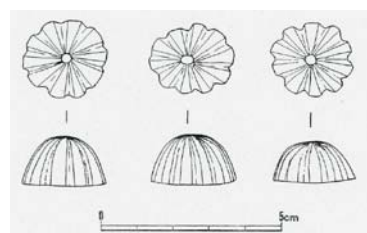


図1 大星山2号墳出土飾金具

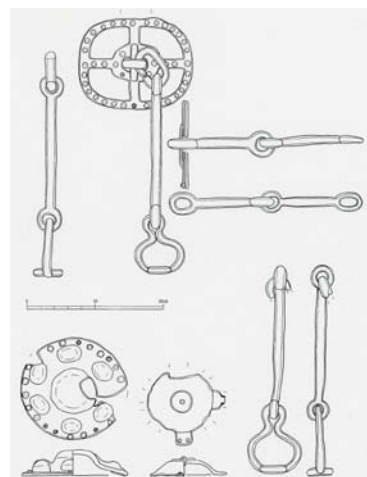


図2 竹原笹塚古墳出土馬具

の詳細については不明としながらも、当時の合掌形石室構造研究から6世紀末葉から7世紀前半と位置づけています(文献2)。

しかし、『長野県史』刊行から34年が経過した現在、馬具研究を進めている宮代栄一氏(文献3)の所見では、竹原笹塚古墳の馬具の年代について、鉢部に円文を打ち出した無脚雲珠の存在から須恵器MT15～MT85型式期の年代を与えることが妥当としています。この馬具の年代が竹原笹塚古墳築造の年代を示すものであると考え、6世紀前半の年代となります。

長野市教育委員会は長野市松代町の史跡大室古墳群の保存・整備の一環で調査を継続してきました。竪穴系横口式の合掌形石室を埋葬主体とする大室古墳群第241号古墳(以下：大室241号墳)の合掌形石室が平成22年(2010)に調査され、調査担当者の風間氏(文献7)は出土遺物の所見から、大室241号墳の築造を6世紀前半とし、現時点で大室241号墳の合掌形石室は大室古墳群で最も新しいと位置づけました。

宮代氏の竹原笹塚古墳、風間氏の大室241号墳の所見を踏まえれば、大室古墳群での竪穴系横口式の合掌形石室をもつ積石塚古墳の築造が終わると、バトンタッチをするように皆神山周辺へ横穴式石室構造の合掌形石室をもつ積石塚古墳が築造されるようになり、この移行時期が6世紀前半と位置づけられました。

善光寺平のみならず東日本においてもいち早く構築された横穴式石室に合掌形石室構造が継承された事実が確認されたことから、大室古墳群での初期積石塚古墳の埋葬者や皆神山周辺の積石塚古墳の初期埋葬者を考える上で画期となる研究成果となりました。

(西山克己)

図1『大星山古墳群』1996年より

図2『信濃大室積石塚古墳群の研究』Ⅳ 2015年より

図3『1:50,000 長野』国土地理院 1998年より一部転載

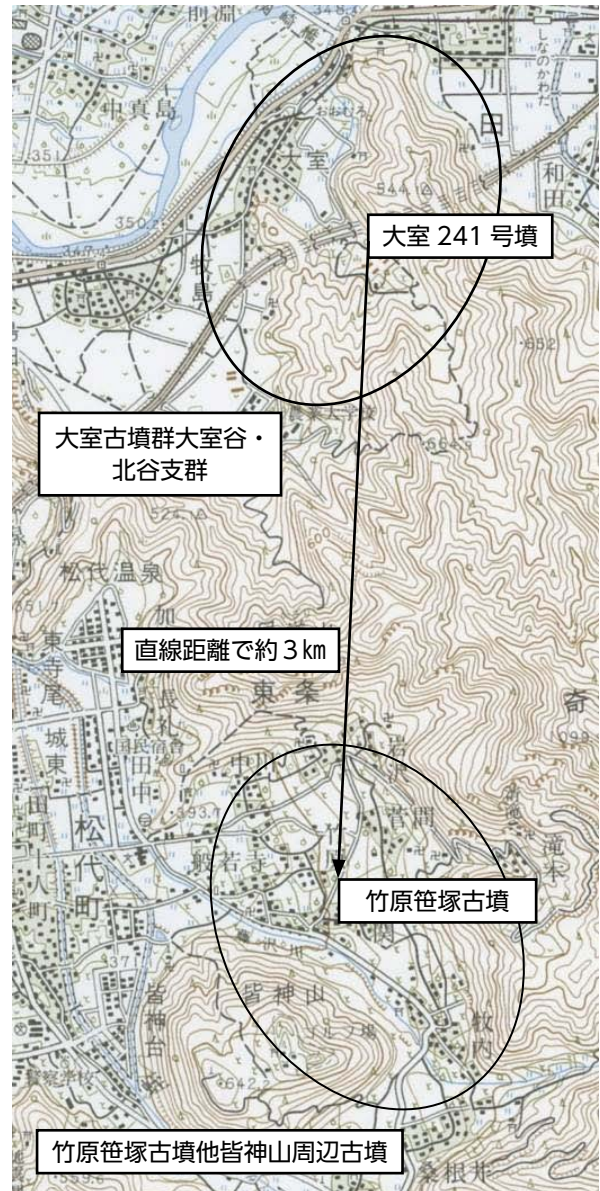


図3 大室古墳群と皆神山周辺古墳

参考文献

- 1 土屋 積「第1部 大星山古墳群」『大星山古墳群・北平1号墳』(財)長野県埋蔵文化センター 他 1996年
- 2 小林秀雄「竹原笹塚古墳・菅間王塚古墳・桑根井空塚古墳」『長野県史』考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)(社)長野県史刊行会 1982年
- 3 宮代栄一「長野県出土の馬具の研究 ―北信出土の環状鏡板付轡を中心に―」『信濃大室積石塚古墳群の研究』Ⅳ 明治大学文学部考古学研究室 2015年
- 4 風間栄一「中部高地」『古墳時代研究の現状と課題』上 同成社 2012年
- 5 平林大樹「武富佐古墳出土遺物の再検討」『長野市立博物館紀要』第15号(人文系) 長野市立博物館 2014年
- 6 諫早直人「第Ⅰ部第2章4. 高句麗馬具の製作年代」『東アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣 2012年
- 7 風間栄一「241号墳」『史跡大室古墳群エントランスゾーン 保存整備事業報告書』長野市 2015年

■平成28年度(2016～2017)

12月～3月の行事予定



12月

冬季展

講座・イベント

休館日
5・12
19
26～31

信濃国の城と城下町
—発掘調査が謎を解く—
12/17(土)～2/26(日)

■講演会

12/23(金・祝)13時30分～
「戦国期における

信濃国の城と城下町」
講師 笹本正治(当館館長)

■講座

第1回 1/14(土)13時30分～
「甲府城跡の発掘調査と
金箔瓦について」

講師 小林健二氏
(山梨県立考古博物館)
「上田城跡の発掘調査について」
講師 和根崎 剛氏
(上田市教育委員会)

1月

休館日
1～3
10・16
23・30

第2回 1/28(土)13時30分～
「松本城跡・城下町跡の
発掘調査について」

講師 竹内靖長氏
(松本市美術館)
「松代城下町跡の
発掘調査について」
講師 田中曉穂氏
(長野市埋蔵文化財
センター)

第3回 2/11(土・祝)
13時30分～

「土岐市国史跡元屋敷陶器窯跡
と美濃桃山陶について」

講師 春日美海氏
(土岐市美濃陶磁歴史館)
「飯田城下町遺跡の
発掘調査について」
講師 馬場保之氏
(飯田市教育委員会)

* 講座終了後は発表者による
展示解説が予定されています。

2月

休館日
6・13
20・27
28

3月

平成29年巡回展

**長野県の遺跡発掘
2017**

3/18(土)～6/25(日)

休館日
1～6
13・21
27

考古学講座

第4回12/17(土)13時30分～
「近世城下町のくらし
～発掘された陶磁器から～」
(中野亮一)

やさしい信濃の歴史講座 in松本
会場：松本市立博物館
12/3(土)13時30分～
「長野県内の近世城郭にみる
城石垣の変遷」(白沢勝彦)
「景観が語る地域の文化や歴史」
(遠藤公洋)

2/25(土)13時30分～
「信越国境をたどる
—塩の道と姫川流域の歴史—」
(福島正樹)

やさしい信濃の歴史講座
「山と信州のあゆみ」

① 12/10(土)13時30分～
「信州の山の信仰」(笹本正治館長)
② 12/24(土)13時30分～
「菅江真澄・ウェストン・シュタイニッ
ツァーが見た信州
—紀行文から信州の生活誌を探る—」
(小野和英)

「SHIGA・KOGENの誕生
—山稼ぎの地から国際的リゾート地へ—」
(畔上不二男)

③ 1/7(土)13時30分～
「黒曜石鉱山からクリ林の里山まで
—高低差800mを
使い分ける縄文人—」(寺内隆夫)
「北アルプス山中の近世集落
—常念岳山腹烏川谷を例に—」
(百瀬新治 安曇野市豊科郷土博物館館長)

④ 1/21(土)13時30分～
「学校登山のはじまり
—長野県師範学校・
長野高等女学校—」(市川 厚)
「学校林が果たした役割の変遷
—更級・埴科地方を中心に—」
(溝口俊一)

⑤ 2/4(土)13時30分～
「描かれた「日本アルプス」
—江戸から明治へ—」(林 誠)
「山をめぐる信仰とその造形について」
(織田銀行 飯田市美術博物館学芸員)

⑥ 2/18(土)13時30分～
「活火山・浅間山と信仰」(山田直志)
「九頭竜神のいわれと
戸隠信仰の始まり」(渡邊 玄)

⑦ 3/11(土)13時30分～
「続・東の牛伏寺・西の若沢寺
—山寺の信仰史—」(原 明芳)

表紙の写真(すべて松本市教育委員会提供)

松本城大手門枅形跡調査風景

出土資料(上から)

水野氏家紋(沢潟紋)入軒丸瓦(枅形跡出土)

織部四方鉢(松本城三の丸跡出土)

古久谷茶碗(松本城三の丸跡出土)

行事アルバム

木曽の伝統芸能に触れる 11月3日



秋季企画展「木曽の宝」関連イベントとして11月3日に行われた「森将軍塚まつり」のステージで、大桑小学校と須原ばねそ保存会のみなさんによる「須原ばねそ」「木曽踊り」、開田小学校のみなさんによる「開田嫁入り唄」、開田高原民謡保存会のみなさんによる「開田高原姫獅子舞」の発表がありました。当日集まった大勢の方々に木曽の伝統芸能のすばらしさに触れていただくことができました。

遺跡探訪会 10月15日



今年度は、信州産黒曜石・イノシシ顔装飾付縄文土器・栗林式土器との関連で「安中市ふるさと学習館」、製糸王片倉家や富岡日記を残した和田英との関連で「旧官営富岡製糸場」を見学しました。また「群馬県立歴史博物館」では「金井東裏遺跡」関連資料を見学し、あわせて上野三碑のうちの多胡碑と金井沢碑の現地見学もしました。

長野県立歴史館たより 冬号 vol.89

2016年(平成28)12月1日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ http://www.npmh.net/

印刷 富士印刷株式会社